
勇者と呼ばれる僕と彼らの存在意義

紅神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と呼ばれる僕と彼らの存在意義

【Nコード】

N4963M

【作者名】

紅神

【あらすじ】

勉強はフツー運動もフツー。イケメンでもなければギャルゲやアニメの主人公みたいなモテモテのハーレム野郎でもない。イジメを受けている訳でも周りからチャヤホヤされている訳でもなく、どこにでもいるようなフツーの高校生がオレ。当たり前のごとく訪れるそんなフツーの日々で満足してた……ある日を境に気付かされた一つの事を除いたら。このお話は俺TUEEEではなく、オレHUTUな少年が存在する意味を探す物語。

オレの親友たちは凄いやつらだと思う。

なぜ複数形なのかって？それは親友は一人ではなく三人いるからだ。

一人目は世間一般で言うところの美少女に当たる人種。頭は異常なまでにいい。テストは毎回95点以上が当たり前というバグキラ頭脳派美少女。因みに生徒会長をやってる。

二人目はオレと同じブサメン。だがとにかく強くなりたいと願い続け努力の結果手にしたのはチート能力。どんなスポーツでも軽々とやりのけてしまう。現在は野球部固定らしいが。

三人目が……何といえいいのか、バグとチートを足して二で割ったようなやつがこいつ。本人曰くフツーらしいが、明らかに一番の異常者。まあ、確かに顔をブサイクでもなければ可愛いとか美しいって感じじゃない。でも、彼女の特殊能力と呼べる技能が明らかに異常なのだ。というのも、他人に出来ることは一目見ただけでやりのけてしまう。それでも本人よりは劣ると言いつつテストはバグちゃん（仮）なみ（90以上）、チート君（仮）なみの運動能力（そこらへんの男子より圧倒的に強い）。

よく他の人達から言われるんだが、今の今までフツーなオレがよくこんな人たちと親友をやってこれた、と。確かに自分でもそう思う。なんせオレはブサメン＋勉強も中の下＋運動も中の下だぞ？

せつかくだから言うぞ。頭脳派のバグちゃんだって運動はオレより出来るし、チート君もオレより勉強はできる。リアル写 眼ちゃん（仮）だって……言わなくてもわかるな……。

一緒にいるだけで泣けてくる……でも、オレもあいつらも互いのことが大好きなんだよ。

……っつか恥ずかしいこと言わせんなっ……！

え？ えーと、なぜこんな話をいきなりしてるかって？

スマン……あまりにも奇妙な現象に待遇してしまったので、そんな状況から現実逃避するためです！

え？ どんな状況だって……？ ハハハ、それは……、

「私はローマ・ブリタニア王国第四十九代国王アンドレイ・PG・ブリタニアだ」

右を見ても人、人、人。

左を見ても人、人、人。

後ろを見ても人、人、人。

前を見ても人、人、人。

オレを囲む人たち……全員が日本人とは違う容姿をしていて。全員がローブのような服を着ていたり、金や銀やらのムチャクチャ派手な衣装っつか鎧っつかわからんものに身を包んでいたり。

一番怖いのが全員の視線が間違いなくオレに集中している。

ハイ、一言でいわせてくださいっ！

「我々の呼びかけに応え、よくぞ参られた……勇者様」

異世界に来ちゃいました、テヘッ

002 - 世界と戦うのが勇者なんです

「私はローマ・ブリタニア王国第四十九代国王アンドレイ・PG・ブリタニアだ。呼びかけに応え、よくぞ参られた……勇者様」

……名前無駄になげえよ、ってツツコミしてもいい？ ……ごめんなさい、冗談です。あんまりオレと歳は変わらなそうに見えるけど国王ということは王様ってことか。もし本当に「おまえの名前はなげえんだよゴラア」と言った頃には、オレは八つ裂きになっているだろうけどな……。

さて、ボケてないで状況整理。学校が終わっていつものメンツで帰宅していて、家のドアを開けたら……「異世界に来ちゃいました、テヘツ」ということになっていた。で、目の前のお偉いさんの発言が正しければ、オレは勇者だから呼ばれたと。ファンタジー過ぎるだろ……アホォー……。

兎にも角にも今の状況を何とかしないと。話だけでも進めておくか。

「はい？ ブリタニア？ 王国？ 勇者？ あのー全く状況が飲みませんんですが……」

「失礼、確か召喚された勇者は異なる世界の住民と聞く。私が順に追って説明しよう」

たぶん王様から告げられることは、テンプレートと化した貴方は異世界に召喚された勇者様です。どうか我々にその力を貸してください。そして魔王を倒してください！ とかだろうと予想する。

って予想しなくても絶対にそうなので、百パーセントの予測……。オレって戦術予報 ですね、わかります。

「先ずは我々の勝手な判断で貴方呼び寄せたことを謝る。しかし私たちの国は、いや世界は滅亡の危機にさらされている。異質な魔物の存在のせいで……。どうが私たちに力をお貸し下さい」

ハハハ、やっぱりそうだ。テンプレートばんざーい！……でも何で「僕」なのだろう。

僕の周りには三人の強力なキャラが……頭脳バグちゃん（仮）、運動チート君（仮）、リアル 輪眼ちゃん（仮）がいるということになぜ凡人の僕が呼ばれたのだろう……。

「力を貸すか貸さないと答える前に……質問があるのですが」
「ええ、何なりと」

それに世界中を探せば三人以上の異常なキャラだっているはずなのに……何で僕？

「オレが元居た世界は少なくともオレの国はですが戦いとかない平和な場所でした。だから戦うことに無縁なオレがどうやって魔物と戦ったり世界の滅亡を回避すれば？」

「伝説によると異界から来られた勇者の方々は、我々を凌駕する圧倒的な力を秘めていると伝えられています。だから後日、勇者様の魔力を測り武器を授ける御つもりです」

「次は、世界の状況」

「ローマ・ブリタニアを除いた全世界は魔物の手に……」

「……はい？」

までまで……なんじゃそりやつ！ 状況が有り得ねえー！
つつかオレにどうしろと言った。普通はさ、30vs70って的な状況に現れて、さっさと逆転して絶望を希望にするのが勇者のお仕事ですよっ！？

ローマ・ブリタニアって確か……ブリタニアはイギリスあたりにあった所だったよね。つまりはイギリスであり。ローマってイタリア……だから……イギリスとイタリアVS全世界という状況だよね？ これって普通に30vs70じゃないよね？ 2vs98だよな？ もう戦いじゃないよねこれ？ 普通にイジメだよな？ んな誰が見ても絶滅寸前な時に、オレ参上！
ってかありえねえ……つつか勝ち目ねえ……。

「最後の質問……僕はどうすればいいわけだったけ？」
「勇者様の力で我々をお救い下さいませ」

はあ、と溜め息をつく。

最初はオレにしか出来ないことがあると思った。けど、これは明らかに誰が来ても人類側に勝ち目はない。

だから僕が思うに……この世界の人たちが「負けそうだヤベエよ勇者を呼べ」って感じで召喚魔法やら儀式をしたんだが、オレの世界の神様は「お前らもうオワタじゃん、勝手に有能な人間を連れてくんじゃねえよ。あ、ほらよ、かわりにゴミやるからこれで勘弁。アハハハ」って感じに僕が呼ばれたんだ。うん、絶対そうだと思う。ヤバイ……そう考えると頭が物凄く痛くなってきた……けど、どうせ帰る方法なんて聞けば「知らない」か「魔王を倒すまで」と返事が帰ってくるだろうし。やりたくないけど……何もしないで死ぬのも嫌だ。だから、

「わかった。協力させて頂きます」
「え……？ 本当ですか！？ ありがとう勇者様」

王様はオレがイエスと答えるとは思わなかったのか、一瞬顔を驚きに染め上げる。すぐに表情を喜びという一色に塗り上げるとオレの手を握りながら何回も「ありがと」と頭を下げる。

なんつーか、思っていたより良い人だな、この人……。

「オレは夏目海斗^{なつめ かいと}。カイトでいいですよ、王様」

「私のこともアンドレイと呼んでくれ構わない」

「おーけー、アンドロイド」

瞬間、周りの空気が凍ったような気がした。

え？ あれ？ オレなんかした……？

「……カイト、私の名前はアンドロイドではなくアンドレイだ」

「え……」

周りを見るとロープを被った人たちが全員が肩を震わせていた、オレに殺気を向けながら……。

うわあ、マジでやべえー！ つつかこええよ！

呼ばれてすぐ公開処刑はやだですううううう！

「ごめんなさいでしたアアアアア」

オレのターン、ドロー！ モンスターを、カイトを召喚する。そして魔法カードを発動！ 「土下座」。このカードは自分フィールド上に「カイト」というモンスターが存在するときに発動することができる。手札またはデッキから「土下座^{ヘタレ}王カイト」を「カイト」を墓地に送ることで特殊召喚するっ！ いでよ、死刑はやめてエエエエエエエ！

「あつはつはつはつは！ カイトは面白いな」

「はい？」

何故かお腹を抱えて爆笑している王様……こいつSなのか？ へ

タレなオレを見て楽しんでいるのか？

「ドローとか、デッキやらは分からないが、名前を少し間違ってたくらいで私はカイトを死刑にはしないさ」

はい？ それってつまり……、

「全部、口に出てたぞ？」

読者な皆さんへ……ごらんの通りに僕は普通でヘタレな弱い男の子です。

はたしてそんな僕ですが、世界を救うことが可能なのでしょうか……。

それは神のみぞ知る……ってやつですね。

「カイトは疲れているだろう、詳しい話は後ほどする。部屋を用意させるから、今日のところはそこで休んでくれ」

「ああ……ありがとう。ってアンドレイ、ここどこ？」

名前で呼べって言うてから王様といより友達みたいな感覚になったアンドレイに聞いてみる。

今の今まで王様ことアンドレイや周りの怪しいローブの人たちに目を奪われて、自分がいるところすら確認とれていなかった。

周囲を見渡すと、まるでそこは……洞窟みたいな感じなのだ。

「ここはブリタニア城の地下だ」

「へえ……地下っ！？ でけえ……さすが王族の城だぜ……」

「あはは、どうも」

アンドレイが言い終わると、オレの後ろに居たローブの二人が口

「ブを脱いだ。鎧を着ていた……兵士なのか？　つつか何故に兵士にローブ？というツツコミは入れたはダメなんだろうな、うん。」

「案内役だ、またあした」

「ああ、ありがとう、アンドレイ。またあした」

兵士の人たちに連れられて、洞窟の奥にある階段を登る。

高い……とにかく高い……が高所恐怖症なのでどのくらい高いのかは省略させていただきます。エコノミーは大事！

「しっかしな……オレに出来るのだろうか……世界を守ることが。何の取り柄もない普通でヘタレなオレに……」。

「バグちゃん（仮）、チートくん（仮）、リアル写輪　ちゃん……あなたの方のアブノーマル性を僕に分けてください。」

003 - クーデターと人類滅亡

「アンドレイ皇帝陛下、お待ちください」

「今はプライベートの場だ。兄でいい、アントニオ」

「はい、兄上」

イギリスに位置する国がブリタニア。夏目海斗が元居た世界で言う処のイングランドとスコットランドはこの世界ではブリタニアの領土つまりブリタニア王国なのだ。夏目海斗の世界のイギリスと同じくこの世界のイギリスも連合王国なのだが、二つの国家で構成されている。ブリタニア王国とイタリア（こちらの世界ではローマ王国と言う）。

「勇者様が召喚された同時刻、ローマから通信を受信しました……」

「……内容は？」

「敵勢力はもの凄い勢いで兵力を増加及び強化されているとのこと。

そして、ローマ王国は壊滅」

「……そうか。これで残すところは私たちのブリタニアのみ、か」

ブリタニア城、首都ロンドンにそびえ立つ巨大な城。そして、人類最後の砦。

ローマ王国が落された今は、残る国はブリタニアのみ。先ほど召喚された勇者こと夏目海斗が聞いたら、「なるほど1vs99じゃねーの」と呟きながらパニックするだろう。

「兄上！ 一刻を争う緊急事態。直ちに召喚した勇者の實力を測り、使えるのなら実戦投入するべきです」

「我が弟アントニオ。彼は私たちの勝手な都合で召喚した異界の民だぞ？」

「分かっております、しかし我々に後がないのも事実です！」

「……彼も人だ。それに召喚の儀は唱える側も呼ばれる側も体力と精神力を削る。さすがにその状態で覚醒の儀は行わせるわけにはいかない」

ブリタニア城の王族と騎士と専属の世話係のみが入ることが許された王室。そこで長いテーブルに向き合うように座り言葉を交わす二人の青年。一人はローマ・ブリタニア連合王国第四十九代国王アンドレイ・P G・ブリタニア。もう一人はブリタニア王国王子アントニオ・S E・ブリタニア。

「だがローマ王国を敗れた今、残された国はブリタニアのみ。魔物軍がいつここに攻めて来るのかも分からないが故に出来る時にやるべき対策を練るのが得策ではないだろうか？」

「休息の時も立派なやるべき事だ。大丈夫だ。魔物軍もすぐにここに来るわけではないだろ。それに、ローマ王国には二人の勇者^{きし}が居た。彼らが倒されたという事は信じたくないが、彼らも一騎当千の力を持った戦士だ。魔物軍に大きなダメージを与えたはず」

「僅かな時間を稼いだだけに過ぎません」

「一週間くらい稼ぐことが出来れば、それまでに勇者を覚醒させれば私たちは勝利という可能性を掴める」

くっ……消極的な無能すぎる王が……つとアントニオを奥歯を食いしばりながら心の中で舌打ちをする。アントニオは子供のときから兄であるアンドレイを見てきた。自分より他の誰よりも優秀な彼を後ろからずっと見てきた。最初は「兄のようになりたい」と思っていた。何をさせても一番なアンドレイは王族でありながら誰に対しても平等に優しく接していた。完璧で人徳な王……それがアンドレイだ。だが、アントニオは兄の欠点を知ってしまってから憧れが一気に絶望そして憎しみに変わった。消極的で優柔不断、判断力の

鈍さ……王として大事な物をアンドレイにはない。こんなヤツが王など許されないことだ、だから今日限りで、

「レイ” 兄さん……」

「ああ……ト二オ」

昔……子供の頃に使っていた呼び名。

民のため国のため世界のため家族のため……アント二オは言う、

「現時刻をもってブリタニア王国国王の座は私が貰い受ける」

「と、ト二オ？ な、何を言ってるんだ……？」

瞬間、王室に次から次へと騎士たちが入りすぐさまアンドレイ元国王を囲い剣を向ける。

「クーデターか！？ お前、今の状況を分かっているのか！」

「ええ、兄上、存じております。だからこそ『人徳の貴方』ではなく『軍事の私』が王になる。この城にいる騎士たちは全て渡しの味方ですぞ」

「……くつ、武力に意味はない」

「魔物相手に人徳や話し合いなど無意味。圧倒的な軍事を持って制する必要があります」

アント二オはくるとアンドレイに背を向けて騎士たちに命令を下さす、

「ただちに覚醒の儀を行う。勇者を連れてこい」

「ハッ」

数人の騎士たちが王室を出る。

向かうは勇者がいる部屋。

「兄上、私がローマ・ブリタニア王国第五十代国王アントニオ・S
E・ブリタニアが貴方に代わり世界を守る」

「ふふ……あっはっはっはっはっは」

「な、何がおかしい!？」

「……いや実はなトニオ。お前がクーデターを起こすのもお前が勇者をさつさと覚醒させようとしているのは分かっていた」

「な、に……?」

「私の計画通りだ」

数十人の騎士たちに剣を向けられているというのにアンドレイは凜とした表情でアントニオを見据える。

「すまん、先手を打たせてもらった」

「どういう事だ……兄上？」

「簡単な事だ……私はお前の兄上でもなければ元ローマ・ブリタニア王国第四十九代国王アンドレイ・PG・ブリタニアでもない」

「……な? あ、も、もしかお前は……」

刹那、アンドレイが文字通り溶けた。

「早く兄上を殺れ!」

「もう遅い」

溶けたアンドレイから現れた、否、アンドレイに化けていた魔物^{かけ}は姿を表した。

皆さん、こんばんわ。皆のカイト君です、テヘッ

……ごめんなさい、冗談です！

オレは今、案内された部屋の中でゴロゴロしている。ベット以外何もない普通の部屋。いや、普通以下かもしれないな。

というかオレは本当に何でこんなところにいるんだろう……ああ、召喚されたのは分かっているけど、やっぱり何でオレなんだ？とかオレでいいのか？とかオレに何ができるんだろ、と思う。話によればイギリスとイタリア以外は魔王の支配下らしい……明らかにフルボッコしてやんよ！状態の中、オレに世界を救うことは本当に可能なのだろうか。

まあ、でもテンプレートと化した異世界召喚モノって基本的に勇者に俺TUEEEな力が宿っているわけで、オレにそんな圧倒的な力があるか否かは置いといて……そんな力があってもVS世界とか無理ゲーじゃゴラッ！

つつかアレ？　そういえば、ここって異世界だよな？　何でブリタニアとか、ローマがあるわけ？　そこツツコミいれるの遅いとか言うの禁止な。オレだって混乱してたからユックリできるまで気付かなかったし。まあ、いいか……今は休もう、何か疲れてるしな……。おやすみなさい……。

「フン！　貴様が妾の主か？　軟弱だのお」

「はい？」

いきなり女性の声が聞こえたので、体を起こす。ってここどこだ……。

気づいたらあたり一面、綺麗な緑に溢れている草原にオレは”立っていた”。オレンジ色の空が少し不気味……。ってあれ？

沈む太陽を背に一人の少女がそこにいた。真っ黒な拘束衣を着た12、13歳くらいの女の子。全てを飲み込むような海と同じ碧色

の長髪。

Mなのか……ハイ、場違いなのは分かりますが、変態^{えむ}という単語が脳裏を通り過ぎたんです。

「えっと、君はだれ？　つつかここはどこ？」

「質問が多い。が、貴様は妾の主らしいからのお、答えてやる。有り難く思え」

「はい？　主？　何のこと……？」

「ウゼエ……質問が多いと言ったばかりだと言うのに、どうして妾が答えるまで待てんのだ？　咬み殺されたいようだのお」

M少女はグルルと唸り声を上げる……が、ごめんなさい、普通に可愛いです、ハイ！

おっと勘違いされても困るので最初に言っておく、オレはかーなーりーロリコンではありません！

「まあよい……説明してやろうかのお」

M少女は言う、

「妾は貴様の一部であり、貴様の力を司る者。いわばもう一人の貴様という訳だ」

「……」

つまり要約すると、こうですね。この世界で来たことでオレの中に精霊みたいなモノが宿った、それがこのM少女。いやいや、まてまてよ……だとするとここはオレの深層心理世界とか精神世界的なアレってことだよね？　で、この少女がオレの一部でオレの前に現れたということは「僕はロリコンです」と言っていると同じで
だろ？　ありえねー……今の今まで健全な男子なオレが……ロリコ

ンだったなんて……しかも拘束衣とか思いつきりMだろ……。マジで泣きたいです。

「で、ここは軟弱な貴様の深層意識。まあ、心の奥だと言うことだのお……うむむ？」

「やっぱりそうかよ！ 分かっていたんだよ、オレは！ ってどうしたの？」

「魔物の気配がする……しかも大軍だ。ブリタニアも落とされるな」「ええ？」

召喚されて間もないというのに……何でこんなことに……。

つつか今の今まで実感がわかなかったけど、改めて敵が来たと言われると……怖い。

どうしよう。

こんな時、バグちゃん（仮）、チートくん（仮）、リアル写輪ちゃん（仮）……あなた方ならどうされますか？

「で、ここは軟弱な貴様の深層意識。まあ、心の奥だと言うことだのぉ……うむむ？」

「やっぱりそうかよ！ 分かっていたんだよ、オレは！ ってどうしたの？」

「魔物の気配がする……しかも大軍だ。ブリタニアも落とされるな」「ええ？」

召喚されて間もないというのに……何でこんなことに……。

つつか今の今まで実感がわかなかったけど、改めて敵が来たと言われると……怖い。

どうしよう……こんな時、バグちゃん（仮）、チートくん（仮）、リアル写輪 ちゃん（仮）……あなた方ならどうされますか？

バーカ、何を考えているんだ。ここにいない人間に答えを求めても返ってくるはずがないだろ。今すべきことは自分の頭で考えて自分で決める。

だから、

「なあ、言ったよな？ きみは『僕』の一部であり僕の力だって」「……」

「お願いだ。力を貸して欲しいんだ」

「フン！ 良かるう。だが条件がある」

条件って？ と僕は首を傾げる。てつきりハイどうぞありがとー的に力をゲットするのかと思ったから。

M少女は歩きながら僕に人差し指を向けて言う、

「今持てる力を全て用いて妾を屈服させてみよ」

……………ハイ？　なんですか？

「弱い主に従う義理も義務もない。否、主に従うなど御免被る。妾を欲するならば力尽くで従わせることだのお」

「ちよつと待って……………！　て、展開がよめ」

「問答無用！」

刹那、M少女が眼前に現れた。いつの間にか右手に持つ自身の身長より大きい剣を振り上げる。

「本気で参る。気を抜くと死ぬぞ」

ヤバイ……………とにかく動かないとヤバイと思い、とにかく横に飛ぶスパツ！　オレが立っていた場所に剣が刺さった。いや違う空気や地面ごと剣で斬った。振り回しただけで小さな衝撃の風がここまで届くし、剣の切れ味は地をも切断する……………とかありえねえーだろ。いやいや、今さらファンタジーな世界について文句を言うなんておかしすぎるだろ

あれ？　つかあの剣おかしいぞ……………よくみると腕から出てる黒い霧が刃を構成しているみたいなき感じ。いわゆる魔力で作ったソードってやつですね、わかりますよ！

「考え事かのお？」

うそだろ……………後ろからM少女の声が聞こえたと同時に前へと飛ぶ案の定、スパツと空と地を切断する音が聞こえた。一秒でも遅れたらマジでやばかった。つかこんな戦い本当に意味があるのかよ、誰かが支配して支配されるとか……………。

「以外にもねずみのようにキョロキョロと動きまわるのぉ」

自分の右手に生えた剣を眺めながらM少女は何か思い付いたように言う、

「あ、そういえば今の貴様はただの人間だった……すっかり忘れていた」

「……え、うそだろ……？」

剣の形をしていた黒い霧は姿を変える。

右手から生えるように現れたのは、銃だ。
姿形からしてハンドガンだ。

「うむ……こちらの方が手っ取り早いのお」

銃口をオレに向ける。

あ、やべえ……逃げなきゃ……考えて直ぐに実行しようとするが、

「さようなら」

バンッ！

空間に響いた銃声。それが耳に届いたときに、痛みが全身を走る。

胸を、心臓に直撃した……こんなのってねえよ……。

- - - - -

何でオレは戦いたいと思ったんだ？

魔物が攻めてくるから？

怖かったから？

自分だけでも逃げ切れる力が欲しかったのか？

いや、どれも違う。

逃げ出せばオレを助けに来てくれた人たちを裏切ることになる。確かにオレの都合を考えず向こうの都合に合わせて勝手に呼ばれた。最初は何で万能的な周りのやつらと呼ばなかったのかなと思った。実際オレは他と変わらない普通で平均的な人間だし取り柄もなければ特技もない。だけれどオレが呼ばれた。というか、ぶっちゃけると考えるのがメンドクサイ。あいつらがオレより出来る？ オレがあいつらより劣るだって？ なんもん知るか。異世界に来てパニックってたのかも知れないが比較したって答えは見つかるわけない。ならさ、今自分出来ることをしようよ。

オレがすることは何だ？

立ち上げられ！ そして前を見据えろ！ んで最後はみんなをまもってみせろ！

戦うのは嫌いだ。誰かが気付くのはもつと嫌だ……だから守る！
あの日……気付いた小さな不幸じゃねーか。

だから守れっ！

- - - - -

「ほほおー……心臓を妾の銃で撃ち抜いたというのに、まだ立つか？」

M少女は胸を抑える俺を見下しながら呟いた。

ああ……立つよ何度でもな。こんなしょうもない所で倒れているヒマないんだ。

「なあ、名前は何て言うんだ？」

「名はない。それに聞いてどうする？」

オレの問いに僅かだが寂しそうに答える。
何故だろうな…… たぶん、オレと一緒に。

「『シエル』ってどうだ？ オレは海斗^{かいと}、海って書くし。だからきみは空、『シエル』だ」

「……か、勝手に決めるな」

「お願いだ。オレに力を貸して欲しい」

「……それは力尽くでせよと妾は言った」

ああ、確かに言ったよな…… 力で私を支配しろ云々って…… だがな、オレは気付いたんだ。

誰にも負けない自身がある、オレの本当の強さってやつを。

「誰にも傷ついて欲しくないし傷つけたくない。暴力だって大嫌いだし反対だ。本当は戦う気すらだってない」

でもな、と付け足す。

「オレに力があるのなら、その力で誰かを守って笑顔にしたい」

戦いたくない……。

だから他の人達に押し付けたかった。

けど、守ることなら……。

「理想ばかりを並べたところで」

「ああ、因みにきみはもう負けているからな」

「なに？」

「ここは現実ではなくてオレの精神世界だって言う事だ」

つまりは精神世界では心の強さがそのままオレの強さになるとい

うこと。

否、今気づけば精神世界という全てがオレが思うがままに操作できるのだ。

こんな感じに、

刹那、

「よー」

「な、なんじゃと……」

シエルちゃんの後ろに一瞬で回り込むことなど朝飯前だ。あれ？
かめはめ波できるんじゃないの？ あ、でもな……シエルちゃんがいるし。恥ずかしい。

「オレの勝ちだよな？ つつかシエルちゃんに勝ち目ないし」

「くっ……わかった。貴様に力を、妾を与えようのお」

「よし、オレも精神世界の半分をシエルちゃんに上げる」

「馬鹿か貴様。貴様をいわばここは貴様の魂であり心であり貴様であるのだぞ。そ、それを半分も失うということは……」

「寂しんだろ？」

「え……？」

「わかるから」

シエルちゃんの人格というか行動原理つつか……色々と、前のオレに似てる。自分自身を許せず嫌いだったオレに……。

たぶん、あの時のオレなんだよ……きつと。なら教えてあげないとな。本当の意味での繋がっている理由ってやつをさ。

「ということで、よろしくな」

「……貴様という人間は……。妾は必ずや貴様を死なせないぞ」

「ああ……って心変わり早いな、助かるけど」

「う、うるさい！　べ、別に貴様が心配なわけではないからのお？　精神世界を半分ずつ共有しているということは貴様の死は妾の死へと繋がる。妾はまだ死にたくないからのお」

「いや、共有してなくても、もう一人のオレだし。オレが死んだら結局は死ぬよな？」

「……貴様、もういつペンしんでみるかのお？」

「遠慮します！」

「宜しい。では現実世界に戻り、今の絶望的な状態から逆転するぞ？」

「おおー！　頼もしいね、シエルちゃん」

拝啓、バグちゃん（仮）、チートくん（仮）、リアル写輪　ちゃん（仮）……この世界にきて新しい友達が出来ました。何とも一人の自分です。今からシエルちゃんと一緒にブリタニアを救いに行きます。

あれ？　そういえばオレの力って結局何？

「よっしゃアアアア！ おきたどオオオオオ！」

体を起こし直ぐにベットから降りる。因みに先ほどの台詞は心の中で叫んだことです。んな恥ずかしい台詞マジではけるほどオレのヘタレは甘くないぜ。

おっと、アホな事を考えてないで部屋を出てアンドレイにシエルちゃんが言っていた魔物の気配について教えに行かないとな。

だが、ドアノブを回しても扉が開かない。どうなってんだ？ こんな時に故障か……？

しかし押しても引いても体当してもビクリとも言わない……つか、何か変な違和感を感じる。

「ほほー、漸く『魔界』に気付いたようだのお」

「はい？ あれ？ シエルちゃん!？」

耳元でシエルちゃんの声が聞こえたんで右を向いたら、オレの肩にシエルちゃんが座っていた。真っ黒な拘束衣と全てを飲み込むような海と同じ碧色の長髪……間違いなくシエルちゃんだけど、ムチャクチャ小さい、本当のお人形さんみたい。それに透けて見えるし……まるでお化けだ。

ああ、分かった。遊 王の闇 戲的な感じね。もう一人のオレだし……それにしてもこの小さいな可愛さは異常過ぎる。かわいいは正義。

「やはり妾の容姿と外見年齢は貴様の特殊な性癖かのお」
「……………」

いやアアアア！ 僕は違うんだ、僕は！ 僕はノーマルで年上
LOVEで愛してる！ ロリに一ミリ足りとも興味は沸かないんだ
アアアア！ ボンキュッボンな大人の女性さいこー！
ってあれ？ まだまだ何かおかしいぞ……。

「も、もしかして……心読めるの？」

「うむ。貴様が妾に精神世界を共有を提言したのであるう？」

「……そんなデメリットがあつたなんて知らないし……っつかなら
何でオレはシエルちゃんの心の声が聞こえないわけ？」

「貴様と妾の同期率が低いからかのお。今は力の流れが妾から貴様
となつておる。で精神の共有も貴様から妾に……つまり一方通行つ
てことだのお。わかるか？」

「……ああ、何となく」

いや、実際は一方通行つて所しか分かつちやいないけど適当に頷
いておく。オレ難しい話は苦手なんだ、テヘッ

「キモイぞ……」

「……ごめん」

一方的な「オレの心、アンロック」はんたーい！ みんなで一緒
に「ネガティブハートにロックオン！ オープンハート！」したい
です。

シエルちゃんの心を思いっきり聴いて弱みを握りたい。

「クロスゾ？」

「ごめんなさい！」

表情豊かで嬉しい限りです……でも怖い顔をマジで怖い、ちっこ
くても怖いです、ハイ。

つとアホは今度こそにしてと。一体全体どうすればいいんだろうな……部屋から出れない。って窓からという手段あるじゃん……。ごめん、前言撤回……。窓から危険、おもくそ高い……。つつかそれ以前に開かないし叩いてもガラスが割れないって……。

「なあ……」

「ん？ どうした、シエルちゃん？」

「貴様は何故に力が覚醒したか分かるかのお？」

「つまりは何でシエルちゃんが目覚めたかってこと？」

うむ、とシエルちゃんは頷く。僕の考えた……召喚されたとき、つまりこの世界に召喚されて直ぐに目覚めたものだと思うけどな。大体の召喚モノってそんな感じだからな。

「でもな実際は違うのだよ」

「どういうこと？」

「この世界で自身に眠りし力を目覚めさせるには『覚醒の儀』と呼ばれる儀式を行わねばならん。だが貴様は、それを行わず力に目覚めた。と同時に魔物軍が攻めて来た……おかしいと思わんかのお？」

「一つ聞いていいか？ 力が目覚める瞬間って……みんながみんな自分の力と戦うわけ？」

「否。貴様は精神世界を直ぐに自分の物にしたが普通は力無き者に出来る技じゃない。そして最初から主を殺そうとする力などおらん。何故なら主が死ねば自分も死ぬのだからな。それに力の目的は主の守護」

何か色々と分かってきたような気がする……この世界の人たちがオレを召喚するタイミングが遅いこととか、いきなり自分の力に殺されそうになるとか……。それに今気づけばシエルちゃんがオレに戦いを挑む少し前に魔王軍が攻めて来た……明らかに話が上手いこ

と進みすぎる、魔王軍側の。

オレが『覚醒の儀』を行わずに力を目覚めたのは、魔王軍側の魔法か何か？

「ほほ、思ったより頭の回転が速いと見た。そこまで理解しているのなら上出来だ、だから妾が説明してやろうかのお。一つ『覚醒の儀』というのは力を目覚めさせる対象に外部から内部に大量の魔力を流しこむだけなのじゃ。もちろん相手に魔力を流し込むなど接触せねば出来ぬことだがのお。先も言ったが力とは本来、主の守護することを目的としてる。外部からの力に反応して表面上に浮上する……そして外部からの力から主を守るため主に力を貸す」

「ちよつと待つて！ オレはこの世界に来てから、まだ誰にも触れてないよ。召喚されてすぐに部屋に連れて込まれたし」

「思い出してみよ。貴様が王の協力を承諾した時のことを」

え？ そついえば……たしか……、

- - -

『わかった。協力させて頂きます』

『え……？ 本当ですか！？ ありがとう勇者様』

王様はオレがイエスと答えるとは思わなかったのか、一瞬顔を驚きに染め上げる。すぐに表情を喜びという一色に塗り上げるとオレの手を握りながら何回も「ありがと」と頭を下げる。

なんつーか、思っていたより良い人だな、この人……。

『オレは夏目海斗。カイトでいいですよ、王様』

『私のこともアンドレイと呼んでくれ構わない』

- - -

「あ……でも、うそだろ……つまり、それって……」

「察しの通りだ」

オレを召喚したのは、この世界の最後の国ブリタニア王国の王様のアンドレイでオレに触れたのもアンドレイで……つまり外部からオレに魔力を送った人物もアンドレイで強制的に『覚醒の儀』を行ったのも……。

「でもさ力って主を守ることが目的でしょ？　ならさ何でシエルちゃんはおれに攻撃してきたわけ」

「アンドレイが貴様の召喚、覚醒の儀をさせた……そして覚醒の儀が実行されると同時に魔物が攻めてきた。そして儀式中の勇者は自分の力に殺されようとしている……ここまで話せばわかるかのお？」

「アンドレイは魔王軍側で……オレを殺そうとしてる。で覚醒の儀に細工をしてシエルちゃんを攻撃的にした」

「ご名答。見ての通り妾の人格となる核の部分はあの頃の貴様。自身を嫌っていた頃の……これ以上に良い殺し屋はいなかるっ？」

なんだよ……これ、つまりそれってさ……。

「ブリタニア王国の内部に、すでに何人か魔物が潜り込んでいる」

シエルちゃんが告げた一言は物凄く重い、

「更に覚醒の儀が失敗したときよの保険か、貴様が出れぬよう部屋に結界が張られている。それも外部との空間と時間の流れ切断系の強力な結界……『魔界』が。ハッキリと言わせてもらっ……おそろく、」

オレってやっぱり最悪なタイミングで呼ばれたらしい……っつか
絶望的過ぎる……。

「ブリタニア王国は落ちた。この城にいる人間は、否、この国にいる人間は貴様だけだ」

現実逃避したい……けど逃げないと決めたんだ。
守るって……。

オレが見ていないところで皆が自分の守るべきものの為に戦って、
オレが見ていないところで戦えない人たちだって苦しい思いをしている。

それにオレが死ねば、みんなが悲しむ。

だからオレは進むと誓う。

守るためにっ！

「フン！ それでこそ妾の主じゃのお。では貴様に力を貸す。受け
取れ」

刹那、肩に座っていたミニおばけシエルちゃんがシュンと姿を消す。

と同時に首元に現れた全てを飲み込むような碧色のマフラー。
不思議な感じがする……力が胸の奥から、全身から、心から溢れてくる。

「これが力を発動するということ……妾と貴様が一つになる……。
主、名を」

へえー、何か最高に気持ちがいい。

「オレこと海斗」と「空ことシエルちゃん」が一つになったんだ

……思う浮かぶ名前は一つしかねえ。
右手で、思いっきり拳を作り叫ぶ オレの、オレたちの名前を
っ！

「空海の勇者シエル・ラ・メール」

瞬間、ドオンと凄まじい地響きを上げて俺たちの拳で結界ごとド
アを殴り飛ばしたっ！

拝啓、バグちゃん（仮）、チートくん（仮）、リアル写輪 ちゃ
ん（仮）……この世界の人たちとシエルちゃんとオレ自身を守るた
めに世界を救う戦いに行ってきます。

まずはオレを呼んだブリタニア王国をぶっ倒す！

006 - ブリタニア攻略の鍵は、もう一人の勇者

「これが力を発動するということ……妾と貴様が一つになる……。
主、名を」

シユンと肩に座るミニおばけシエルちゃんが姿を消すと同時に首元に現れたマフラー。

まるで全てを飲み込み包み込むような大海と同じ碧色のマフラーから不思議な力を感じる。

否。胸の奥から、全身から、心の奥底から吹き出すかのように溢れでてくる、それ。

それは一体感と安心感。

へえー、自分が自分ではないのだけれど自分であるという言葉で表せられない感じ。

とにかく今は最高に気持ちがいいってことは確かなのだ。

「オレこと夏目海斗」と「もう一人のオレこと空のシエルちゃん」が一つになった……。

思っ浮かぶ名前なんて、考えられる名前なんて一つしかねえじゃねえか。

体中からあぶれる想いと力を一点に集中する……右手に集まる不思議な感じ思いつ切り掴み握るように拳を作る。

そして、叫ぶ　オレの、オレたちの、オレとシエルちゃんの、勇者の名前をつ！

「空海の勇者、シエル・ラ・メール　……！！」

瞬間、オレが放った右拳がドオオオオンと凄まじい地響きを上げ

て結果ごとドアを殴り飛ばした。

――

………はて。燃え展開らしかったので勢いに任せちまった……。まさか”私”のパンチがここまでの威力だったとは……私って恐ろしい子。ってあれ？ 何で”私”なんだ、っつか”私”って言えないどうなってんの？

「貴様の言語機能を少し弄らせて貰った」

「はい？ シエルちゃんの仕業かぁー！ 何で”私”の呼び方が”私”しか言えないんだよ？」

「力の発動は、『主である貴様』と『力である妾』が一つになること。つまり妾たちは二人で一人であり貴様は妾でもあるのだぞ？」

オレなどという下品な人称など妾が言わすと思うかのお？」

「ギャー！ 勝手に何してくれてんの！ ……ってこんな事をして
いる暇はないか」

これが超感覚とか気配探知能力とか言うのだろうか。何となく直感でだけ数十の何かがこっちに向かってきている。

物凄く近い……っつか近づいてきている。良い感じはしないから何となく敵だと言うことは分かるから魔物が先ほどぶっ飛ばしたドアの音を聞いて、こちらに向かってきているということかな。

「シエルちゃん、どうすればいい？」

「そうだのお……いくら貴様が勇者と言っても戦闘経験無し疎か今使える技は無し……一国に侵略し奪い取ることに成功した現魔王ブリタニア王国を相手に殴ると蹴るだけで勝てる自信はあるかのお？」

「……………」

はい？「シエルパンチ」と「ラメールキック」だけでブリタニアと戦う覚悟だつて……？

ないないつつか無理無理無理無理。んな馬鹿みたいな冗談は聞かなくても分かるだろ？

私たちだけじゃ勝ち目は絶対にありません……つつか魔物つてどんなやつらなんだ？

「魔物の姿など後から嫌というほど視ることになる。よし、では今から妾たちがすべきことは一つだけじゃ」

「一つ？」

「今、捕まっとるブリタニア王国にいる……もう一人の勇者を開放すること」

「……はい？」

ちよつと待て……異世界モノでは勇者は普通は一人つしょ？最強＋チート能力を持つ性格はめちゃくちゃキザなやつでニコリと笑っただけでどんな女性も落とすニコポや、頭を撫で撫でただけで異性の顔をポツと赤く染め上げるナデポを持つハーレム野郎！神様もびつくり仰天な絶大な力を持つのが異世界から召喚された勇者だぞー！？

んなもん二人もいて貯まるかアアアアア！

「……何にキレてるのか知らんがのお……貴様が最後の、12人目の勇者だぞ？」

「…………はい？………今、なんて？」

「それに貴様の容姿じゃハーレムは無理じゃ……おっと、話す時間は終わりじゃ魔物が来たぞ」

……チツ、12人目ということは勇者は12人いる事実には驚きだけど今は目の前の驚異を何とかするかつつかさり気無く私のブサメン

姿を笑ったな戦いが終わったら私の本気を見せてやる、と思いがから殴って壊れた完全にオープンと化した入り口を見る。

現れた……一人、また一人、更に一人……次から次へと現れた魔物たち。

「……な、なんだよ……これ……」

入ってくる魔物の姿はどれも同じ……一言で言うのなら三次元に現れた二次元の影。つつかそれしか表現の仕様がな。人の形に限りなく近いのだけれど、そうでもない……肉体や表情はあるのかさえも分からない。否、光すらも感じられないような……とにかく影！

人に近い影の魔物はそれぞれ「剣」や「槍」などを手に持っている。何気に武器だけリアルな代物っていうのが怖い。数は圧倒的にあちらの方が多く有利のはず……だが、見えない壁があるかのように近づいてこない……どうしたのだ？

つつかアレ？ 部屋から出て行く……どういうことだ……もしかして、勇者として覚醒した私からパワーアップした愛 隊長みたいに一般人つか雑魚兵じゃ近づいただけで霊圧で潰されるとか……？ ハハハ、私すげー！

「んな、ことあるかアホがあ」

「うむむ」

「説明はあとじゃ、やつら直ぐに『魔界』を修復して入ってくるぞ。今のうちに窓から逃げんか」

「……でも高いよ？」

「フン！……一つとなった妾たちの力を信じて思いっ切り飛べ」

オーケー、もう何でも来いだアアアア！ 地を踏み台に思いっ切り飛ぶ。否、宙を翔け、そのまま窓を突き抜けるのは、面白く無いので体を回転させ、

「ラメールキックウウウウ！」

現必殺技を結界をまとった窓に放ち、パリンとガラスが壊れる音と共に破る。

「たまやアアアア！」

もちろん、花火は空へと放り込まれた（飛んだ）私だ。高いというのに不思議と怖くなかった。シエルちゃんと一つになってから溢れ出す安心感のおかげだろう。勢いがなくなると重力という地球の法則に従い落ちる……。

目を瞑る……五感を手放し第六の感覚に意識を集中する……。

超感覚、気配探知能力……直感でいいか。

一、十、三十、五十……？ 否、ブリタニア城の外つまりはブリタニア城の庭園にいる魔物の数を補足し目を開く。

ズドンと音を響かせ見事に着地。よし……正直に言っちゃえば自分の実力も敵の実力も分からないのに戦うのは無謀だ。だから戦闘はなるべく行わない。だって目的は私が戦うことではなくて、もう一人の勇者の開放なのだから。

「シエルちゃん」

「承知。だがすでもう一人の勇者の位置は把握できておる」
「どこ？」

「貴様が召喚された洞窟……つまりは、城の地下じゃのお」

「道は？」

「……貴様、覚えておらんのか？ まあ、よい最短且つ安全な道を教えてやる」

頼もしいぜ！ んじゃ、道案内はシエルちゃんに任せた……勇者
の初仕事とにかく行くぜ！

「シエルちゃん」

「承知。だがすでにもう一人の勇者の位置は把握できておる」

「どこ？」

「貴様が召喚された洞窟……つまりは、城の地下じゃのお」

「道は？」

「……貴様、覚えておらんのか？ まあ、よい最短且つ安全な道を教えてやる」

頼もしいぜ！ んじゃ、道案内はシエルちゃんに任せた……勇者の初仕事とにかく行くぜ！

先ずは……どこに行けばいい？

「右から城の裏へ回れ」

うんうん、と心の中で相づちを打つ地を蹴る。さっき飛んだ時に気付いたが一度蹴り込むごとに10メートルくらい一気に進むことが出来る。自分で言うのも何だけど、とにかく速い。風になる、という言葉が似合う。

そうだ私は風になったんだ！ ハハハハハハ！

「……………」

「ゴホン、ここだね？ シエルちゃん」

「……ああ」

もうマジで嫌だ……一方的な「私の心、アンロック」はさ……、今は消えてるけど感じるんだシエルちゃんの危ない人を見る目で私を見てるって。泣きそうです。つつかアレ、おかしいな……目から

汗が出てきた……。

「アホおが泣くな。ほら、そこに扉があるだろ？」

「うん……ああ、入るんだな」

ドアノブを回しドアを開けると　　槍が頭を目掛けて飛んできた。

「っ！」

やべえ、殆ど無意識に頭ごと体を後ろに倒す。そのまま後方倒立回転とびかブリッチを決めたいところだけど、突然の攻撃でそこまですぐに頭が回らず地面にゴオンと頭をぶつける。

いつてええええええええ、頭を抱えるがそんな暇はない。

殺気を感じて横に転がり立ち上がると、自分が先ほど倒れていた場所に槍が刺さっていた。

少しでも回避するのが遅れていたら串刺しになっていた……考えるただけでもつつか考えたくない。

「扉をあけると魔物がいるから気をつけることのお」

「遅いわアアアア！ 私、危うく死にかけたんだぞ！？」

「ほれ……モタモタしておるから後ろからも」

「はい？」

後ろ振り向かず直感だけで足を器用に動かして体を右に回す。剣を上から下へと切り落とす影は、簡単に（偶然）それを避けた私を睨みつける。そんなに睨まれても私は困る。

刹那、横から襲いかかる殺気に向けて蹴りを放つ。当たったのは槍だ。魔物の手から蹴り落としたのだ。勢いを崩さず手刀で剣を持ち上げようとした魔物の手首を叩き剣を離させる。落とした武器を

蹴り飛ばして遠くに投げる。

よし、これでオーケー。攻撃して来ないうちにさっさと扉に入りましょうか。

「貴様」

「ん？」

裏の扉から城内に侵入し洞窟に向けて走っているとシエルちゃんが声をかけてきた。何だが凄く不機嫌そうな感じに……。

「なぜ魔物共に止めを刺さなかった？」

さっき裏口前で相手をした二人（？）の魔物か……確かに武器を取り上げただけで殆ど何もしていなかったな。

でも当たり前じゃねえか。トドメを刺すとかアホらしい……。

「シエルちゃん……私は宣言したはずだよ。守るって」

「つまり魔物も守る対象だと言うことか？」

「ああ」

私は魔物の事を何も知らない。だから、だよ。

知らない相手を一方的に攻撃するなんて……逃げていると同じ。

それにもしかしたら魔物には魔物の社会っていうのがあると思うんだ。友達がいて、仲間がいて、家族がいて……人と変わらない当たり前な世界が。知らないという理由でそれを壊すなんて私には絶対出来ない。

「なるほど……では何故に話しかけない？」

「……………」

「怖いのか？」

「……っ！」

だって……全身影なんだよ！ 剣とか槍とか振り回しているんだよ？ 怖がるなぁーっ！ 一方が無理に決まってるんじゃない！

シエルちゃんは私を誰だと思っている！？

「……ヘタレな主だ」

「……ごめんなさい」

「まあ、よい右に曲がれ」

おう、つと壁じゃんか……壊せつてことが、任せろ。二カツと笑いシエルパンチを壁に叩き込む。ゴロオンと暴力的なやり方で道が完成。

つて何だ、ここ？ 変な部屋だ……。

「この下が洞窟の入り口だ」

「よっしやアアアア」

右足を頭上高く上げてから勢い良く床にラメールキックをぶち込む……が壊れない？

あれ？ 何で？

「どうやら、あれのせいじゃのお」

「……なにあれ……？ つて言わないで、言わなくてもわかるから」

私が壊した反対側の壁を壊し魔物が入ってくる。しかし、他の魔物とは違いとにかくデカイ。

三メートル前後くらいあるのは確かでしかも筋肉モリモリの肉体。右手の代わりに義手のような斧、左手の部分には連射銃を着けている。

さて……読者さんもう一つのことかお分かりですね？ ハイ、そうですね！

これが噂の「ここを通りたければ私を倒していけ」で有名な中ボスってやつです！

「他の雑魚どもが来る前に片付けて置きたいの…… 3分で終わらせろ」

「……はい？」

「3分じゃ」

拜啓、バグちゃん（仮）、チートくん（仮）、リアル写輪 ちゃん（仮）……未知の存在から人間を守りたいけど、未知の存在も守りたい。そんな私はどう戦えばいいのでしょうか。

みんなを守りたい……私は最後まで信条を曲げたくない！

「どうやら、あれのせいじゃのお」

「……なにあれ……？ って言わないで、言わなくてもわかるから」

私が殴り壊した壁の反対側の壁を壊しながら魔物が現れた。だが、他とは明らかに違う。

三メートル前後はある長身で横幅が太いが無駄がない、言うならば豊富且つ引き締まった肉体。左右の手首から生えているのは五本の指で構成された右手や左手のではなく右手の代わりに斧、左手の代わりに連射銃が付いている。

私が今まで見てきた魔物は影としか言い表せない黒と白で構成された者たちばかりだったが目の前に立つ魔物は他とは違い血のように赤い眼光で私を睨む。こいつの瞳は赤、他は白。それだけの違いのはずなのに同じ場所で同じ空気を吸うだけで体が重い。

まるで蜘蛛の巣に引っかかった蝶のように……。

読者さんもお分かりだと思いますが私こと夏目海斗とシエルちゃんは噂の「ここを通りたければ私を倒していけ」で有名な中ボスつてやつに遭遇しました。超怖いです、さっさとここから逃げ出したいくなる気になるかも……。

「他の魔物が来る前に片付けて置きたいのお…… 3分で終わらせろ」

「……はい？」

「3分じゃ」

シエルちゃんが告げた時間は物凄く短すぎる。立つだけでも威圧感で潰れそうだと言うのにたったの三分だけで目の前の敵は倒せない。かと言って確かにその通りである。ブリタニア城にいる魔物の数は半端なく、私の実力で一人一人を確実に相手をするなど出来る

はずがない。今の状況は一人の人間vs一国なのだ、特定の位置に長くいることは自殺行為に近い故に一箇所に留まるのではなくて常に移動を続けなくては行けない。

よし、私がやることは一つ、目の前の敵を倒して先に進む。

拳を作り足に力を込める、全神経を研ぎ澄ませる。

巨人の魔物と私の距離は四十メートルくらいだろ。城の周りをラニンングしたときに適当に測ってみたが二、三秒あれば届く距離。

一気に決める！

瞬間、飛ぶ。右足で地を蹴る、次に左足で蹴り 二十メートルを一秒で走り切る。

右腕を後ろに構え中から溢れてくる力を右手に流し込む。もう半分も一瞬で駆けて敵の眼前に迫った。

終わらせる、敵の顔面に拳を放つ！

「シエルウウウウパンチイイイイ！」

放たれたのは私の一撃の拳、その一撃を受けた壁を容赦なく壊した。

そう私の攻撃が当たったのは巨人の魔物の後ろにあった壁だ。

何が起こったのか。確かに私が殴ったのは壁ではなくて魔物だったはずだ、一体なにが？

崩れる壁を見て我に返る。

「くっ！ あいつはどこ？」

周りを見渡すが……いない。うそだろ？ もしかして透明になれば物理攻撃無効とか言う遊戯の王の苦労人もびっくり仰天なインチキ効果など持っているとも言うのか。仮にそうならマジで勘弁だ。視線を右に……いない。

左に……いない。

正面……黒い壁。黒い壁？

「ま、まさか」

上を見上げると目の前で私めがけて斧を振り下ろす魔物。
速い間に合わない　とっさのことで腕をクロスする。出来るだけ早く出来るだけ多くのありったけの力を注ぎこむ。

ドバアアアアン！

私の両腕と、巨人の魔物の斧が衝突した。

それだけのシンプルな動作にも拘らず、私たちを中心にドーム状の衝撃波が広がった。

重い一撃、それを魔力を纏った腕の鬨ぎ合いは強力な爆風を生む。もちろん中心地にいる私の体力を大幅に削る。全身から感じる痛みに唸り声が口から漏れる。

いたい……手がやばい……確かに力を入れている力を流し込んでいるはずなのだが感覚がない。

「く……くそっ……っ！」

こんな所でヘタレてる暇はないんだ、三分でケリをつけるなくてはいけないんだ。

歯を食いしばり、たった一度攻撃を受けて悲鳴を上げる体に鞭を打つ。

まずは、

「離れろオオオオオ！！」

無我夢中で何と言えいいのか分からない、とにかく気合で斧こ

と巨人の魔物を押し返す。

よし 私のカウンターを受けて巨人の魔物はバランスを崩す。
今度こそ決める！

右足を軸に巨人の魔物の懷に飛び込み、左足に力を集中した「ラ
メールキック」回転キックバージョンをお見舞いする。

「え……」

今のは見えた。巨人の魔物が文字通り一瞬で消えたのだ。

残り一ミリ程度で私の技が当たるという所でダウンと姿が消えた。
やはり透明能力を持つのかよ！ 物理攻撃無効の！

刹那、殺気を後ろから感じ取り振り向かず横に転がる。

ドガンと言つ音を聞き顔を上げると目の前に立ち塞ぐ黒い壁。

うそだろ、速すぎるだろ 今度に残る魔力を足に流しこみ走つ
て攻撃を避ける。

どうなつてんだよ！ 透明になつて物理攻撃を無効化する類の能
力じゃないのかよ！

一度この部屋から出て体力を回復しないと……そう思い巨人の魔
物が壊した壁に一直線に向かう。

私の足なら一瞬で壁に向こう側のはずだった、

「ぐはっ」

ぶつからなければ。全速力で壁らしき物に頭から思いつ切りぶつ
かり視線が揺らぐ。

一体何が……何とかこらえて正面を見据える。
瞳に入ってきたのは……

「マ、ジかよ……」

左手の連射銃をこちらに向けて、
ニヤリと笑う巨人の魔物だった。

そして、

閃光と共に放たれた数え切れないほどの弾は容赦なく私の体にぶち込まれた。

008 - 巨人の魔物（後書き）

連射銃 Ⅱ ガトリング砲。

自分的に連射銃の方が呼びやすいので。もちろん造語ッス。

オレは”僕”が嫌いだった。

僕もオレを憎んでいた。

できる事なら殴り飛ばして蹴りつけてやりたい。

とにかく傷めつけて苦しめてから手に掛けたいと何でも思った。

だけど……そんな事をする勇氣も覺悟もない。

オレは無力で……僕は弱くて……幾日も幾日も自己否定と自己嫌悪を繰り返した。

僕……昔からオレは自分の事を僕と呼んでいた。

オレ……弟が入院していた頃から、いつの間にかたまにだけ自分の事をオレと呼ぶようになった。

けど今では”オレ”がメインの呼び方だ。

「何でオレ、こんな所にいるんだろうな……」

辺りを見渡しても瞳に映るのは闇。闇。闇。闇。闇。闇。闇。

闇。闇。闇。闇。闇。

オレを覆い尽くす真っ暗闇だけ。

ねえ、僕は何で生きているの？ 忘れたわけではないよね……
オレの罪を。

忘れるわけがない。今でも瞼を閉じれば僕の記憶の本棚から真っ先に取り出された”それが”僕の目の前に置かれる。

「唯一の家族だった……弟を、シエルを……殺した」

あれは僕が今まで生きてきた中で13回目に訪れた夏の始まりだった。

母親と父親の仲は最悪だった。毎日のように口論を繰り広げ時には殴り合い。

正直、喧嘩の内容は分からなかった。否、どうでもよかった。

小さい頃からあんまり相手をしてくれなかったし表面上は教育と語っていたが明らかにストレスを発散するために当時中一の僕と小四の弟シエルを殴ったり蹴ったりしていた。誰かに与えられる痛みは不思議と我慢できたけどシエルが泣く所は見たくないから何回も親から大事な弟を庇った。兄が弟を守るのに理由はいらない、泣いていたら笑顔にする当たり前のことだろ？

他にもシエルには夢があった。サッカー選手になる夢があるんだ。毎日の練習で疲れているのにそこに暴力を加えられてもしもの事があればどうする？ 弟の夢を守るのも兄の仕事だ。

『兄さん、オレを守ってくれて、ありがとう』

その一言が僕が生きる源だった。

どんなに酷い暴力を受けても。

自分に自身がなくても。

弟がいるだけで僕が存在する意味をこの手で掴み続ける事ができたんだ……。そう、できたんだ……。

翌日の朝。シエルが真っ赤な血の塊を口から吐き出した。

突然過ぎて何が起ったのか理解できなかった。

あれほど息子を殴っていた母さんが涙しながらシエルを抱いていた。

あれほど息子を蹴っていた父さんが悲しい顔して電話をかけていた。

もう一度言う……突然すぎて僕には理解できなかった。

入院。シエルは入院した。

正直どんな病気なのか僕には分からなかった。否、どうでもよかった。

弟が元気ない……それだけが僕の心を抉る。

僕は弱い。何も出来ない。弟が苦しんでいるのに何も出来ない自分が憎い。だからせめて今、自分が出来ることをしようと行動に移した。

シエルが入院して一ヶ月の時が流れた。僕は毎日、毎日、一日も欠かさずシエルに会いに行った。シエル曰く、

『病院、て何も、すること、ないんだよ……』

確かにシエルの部屋に最初に訪れたときは何もなかったから行く度に家にあるモノや途中で買った漫画やゲームやお菓子屋や雑誌とかカードなどを渡した。一杯一杯、話もした。元気が無いから弟が笑ってくれるようにオレもシエルみたいな元気で 明るいキャラを演じた。

来るたびに笑顔にするたびに、

『あ、りがと……』

を聞けるのが嬉しかったけど悲しかった。

オレは、僕はシエルが笑ったとき物凄く嬉しい。でも来る度に弱まるシエルを見ると、声を聞くと体が震えた……恐怖に、だ。

唯一の家族。失いたくない。早く元気になって。

しかし願いは叶うことはなかった。

夏の終わり。いつものようにシエルと病室で会話を楽しんでた時だった。激しい咳き込みと共に何でも赤い血を吐いた。

弟の容態が急激に悪化した、頭が悪い僕にでも分かった。嫌な胸騒ぎもした……早く誰かを呼ばなくちゃと思った僕はナースコールを押そうとしたが、

『兄さんと……外、歩きたい』

僕の手を掴みながらシエルが言った。ダメだ、ダメだ、ダメだ、ダメだ。断るんだ。今の状態は誰が見ても最悪、お医者さんを看護婦さんを……早く呼ぶんだオレ……。でも、それが出来ないのに強い何を感じた。弱っている弟から感じた強い何か。そうだ弟は強い、そう自分に言い聞かせてシエルを車椅子に座らせて病院を出た。

二人で外の街に出るのは久しぶりだった。苦手な人混みの中を歩いているはずなのに……感じられる存在は二つだけだった。

僕と弟。

『ねえ、にいさん……』

うん、と頷く。

『おねがい、が、あるんだ……』

うん、と頷く。

『オレ、ね……ゆめがあった、んだよね……』

知っている、と頷く。
優しくて強い弟の夢。

『サッカーせん、しゅになって……み、んなをえがおいっぱいにするんだ……』

うん知ってる、と頷く。

小さい頃からのシエルの夢……サッカー選手は手段や過程にしかなかった。

本当はその先にあるものだ。

多くの人に夢を与えたい。笑顔にさせたい。みんなをハッピーにしたい。

何回も……何回も聞いたシエルの夢……。

人のために生きたいという切実な想い。

『でね……にいさん、にもてつだって、ほしい……』

当たり前だろ今さら何を言ってるんだよ、と笑顔で答えた。
お前の夢は僕の夢だ。

『……ニシシシ……ありがとね、兄さん……』

ああ……一緒に頑張ろうな。

ああ……とにかくまずは元氣にならないとな。

ああ……練習も一杯しよう。

ああ……約束するよ。

ああ……オレはお前の兄だぞ。

ああ……ああ……わかってる……わかってるから……。

僕は君を笑顔にする事が出来ても、他の誰かを誰に笑顔を与えられる自身がない。

考えたんだ、だからさ……みんなの笑顔を守るよ。

それが僕の夢。

- - - - -

ねえ、僕は何で生きているの？ 忘れたわけではないよね……
オレの罪を？

忘れるわけがない！

目をユツクリ開くとすぐに五感の感覚を確かめる。自分で言うのも何だけど凄いやられようだ。少しでも体を動かすと痛感が脳に訴える。

勇者と呼ばれたけど結局は魔物の罠だっただろ。頑張った物凄く頑張った、っつか頑張りすぎた。もう休んでもいいんじゃないのか？知らない人たちを救うためにボロボロになって戦ったんだ。もういいから休めよ、オレ。

ばっかじゃねえの！

確かにさ体中が悲鳴を上げているが、まだ動ける。たとえ罠でもな僕を必要としてくれる人たちがいるのなら命を掛けて戦う理由はそれで十分。困っている人を守って助ける。

笑顔を与えることが出来ない僕が唯一できることは、みんなの笑顔を守ることなんだよ！！

- - - - -

左手の連射銃をこちらに向けて、
ニヤリと笑う巨人の魔物だった。

そして、
閃光と共に放たれた数え切れないほどの弾は容赦なく私の体にぶち込まれた。

十、
百、
千、
万！

痛い、痛い、痛い、痛い……でもね、負けられえ！

私には……オレには……僕には！

叶えたい夢があるんだあつ！

撃つのを止めた巨人の魔物が明らかに何発放つても倒れない僕を見て驚愕している。

僕の背は……オレとシエル、世界中の笑顔を背負ってるんだ。
何度も何度も攻撃を受けたとしても……私は絶対に倒れない。
そして”私たち”は勝つつ！

「シエルちゃん！ 力を貸して！」

僕は高らかに呼ぶ。

オレの半身。

もう一人の私の名を。

弟の名を受け継ぐ相棒。

「漸く妾と貴様が一つになるという意味を理解したようだのお」
「ああ」

約束を、

夢を叶えるために守る！

LAST - 私達の戦いはこれからだッ！

閃光と共に放たれた数え切れないほどの弾は容赦なく私の体にぶち込まれた。

十、
百、
千、
万！
痛い、痛い、痛い、痛い……でもね、負けられえ！

私には……オレには……僕には！

叶えたい夢があるんだあッ！

撃つのを止めた巨人の魔物が明らかに何発放つても倒れない僕を見て驚愕している。

僕の背は……オレとシエル、世界中の笑顔を背負ってるんだ。
何度も何度も攻撃を受けたとしても……私は絶対に倒れない。
そして”私たち”は勝つっ！

「シエルちゃん！ 力を貸して！」

僕は高らかに呼ぶ。

弟の名を受け継ぐ相棒。

オレの半身。

もう一人の私の名を。

「漸く妾と貴様が一つになるという意味を理解したようだのお」
「ああ」

僕の夢は弟の夢だった。弟が居たから皆を守りたいと思える今の僕が居る。

兄弟二人で一人の夢。だから僕は前へと進める。力も同じ。オレが居てシエルちゃんが隣にいるからオレは全力で戦えるんだ。

誰かがオレを後ろから隣から支えてくれるからオレはオレでいられて本当のオレでいられる。

二個で一個の存在。

支えてくれる誰かを忘れてしまったら私は私だけで本当の私ではない。

どこに行けばいいのか？

なにをすればいいのか？

どうしたいのか？

なにをおもうのか？

全く分からなくなり全てを見失う。

巨人の魔物と対峙した時が良い例だ。

隣りに立つ存在を忘れてしまいシエルちゃんを感じられなかった。

焦りや恐怖で自分の信条が塗りつぶされる。

故に支えてくれた者を忘れて一人で戦っていた。

でもそれじゃダメなんだ。

怖いって思ってもいい……かと言って私が信じる事から身を逸らしてはダメ。

無理だとか怖いとか思えば真っ先に頼る。

二個で一個の存在なのだから。

「……シエル、ちゃん」

「何も言つな。こやつのはわかっておる……ただの高速移動じゃのぉ」

「え？ 透明化じゃなくて？ しかも透明になると物理攻撃無効！

的なインチキ効果じゃねーの？」

「うむ。目では追えないほどの移動速度」

シエルちゃんと言う、

「全魔力を一点に集め放出せねば軽い一撃も防御できぬとは……辛いのお」

「勝てる見込みは？」

「貴様だけだと限りなくゼロに近い」
「……」

うつ……分かってる。私だけだと巨人の魔物の移動にも付いて行けないし攻撃を当てられないし防御も出来ない。

ギリギリの所で回避しか……。もっとも回避だけなんて明らかに負けフラグ過ぎる。

「だが」

「？」

「あくまでそれは貴様だけが戦う場合だのお。妾と一緒に戦えば勝率は五割に跳ね上がる」

「いいねえー。で、どうすれば？」

「先ずやつの行動を目で追うな。殺気を感じる。攻めて避ける。とにかくやつに撃たせる」

了解、と返事をして巨人の魔物に突っ込む。

シエルちゃんが何を考えているのか分からないが私は彼女を、相棒を信じるのみ。

左手で作った拳を放つが私の視界から消える。

一瞬、目で追いかけられるが目を瞑り第六の感覚に意識を集中させる。

右だ！

相変わらず早い攻撃。

足に魔力を溜めて距離を取ろうとするが、

「視覚に頼るな。殺気を感じろ！」

「！」

敵の攻撃が放たれた中、私は再び目を瞑る。

感じる　敵の流れが。

右足で一步、左足で一步だけ前に進みギリギリの所で攻撃をかわす。

まだだ！

左足を軸に魔力で加えて体を右回転させて飛ぶ。

「ラメエエエエル、キックウウウウ！」

巨人の魔物の頭をめがけて蹴りを放つ。

が、敵の移動速度は僕のカウンター速度を上回っていた。

頭を狙ったつもりが空気を蹴ったのだ。

チツと舌打ちが出た。もう少しだと思ったのに……でも行ける。

避けるだけは無理だけどカウンターを合わせれば勝てる。

なるほど流石シエルちゃんだぜ。

「気を緩めるな。来るぞ」

今度は後ろ。

縦ではなく横からの一振り。

それを飛び上がることで回避する。

更に後方転回の一歩で宙で体を回転させ、もう一度蹴りをぶつける。

いわゆるオーバーヘッドキックだ。

「またかよっ！」

これも避けられた。つかどんだだけ反射神経がいいんだよ！

攻撃直後のカウンターを二回もかすりもしないって移動速度より反応速度の方がチートじゃねーか。

このままじゃヤバイと齒を食いしばる。

移動速度と反応速度と攻撃力は巨人の魔物の方が上。私があいつに勝るのは回避力のみ。

頼みの綱であるカウンターもヒラリとかわしちまう……。

つまり体力勝負。

しかしそれだと不利なのは普通に私だ。斧による重い打撃と銃からの連続射撃を受けて体力も魔力も殆ど残っていない。

立つだけで辛いのに、僅かミリ単位だけでも動く体が悲鳴をあげる。

持久戦はダメだ……何が何でも次は当てないと私たちがヤバイ。

「言ったのお？　なら守れ、全力で耐えろ」

「え？」

刹那、前方から私から数十メートル離れた場所から感じ取った殺気の発生源を見る。

左腕と一体化し左手となった連射銃の標的を私に向けていた。

ヤバイ……体が震えた。恐怖心ではない。理解したからだ。

勝利へのルートを。

「貴様、これがラストチャンスだと思え」

「ああ」

シエルちゃんの言葉に短く返事を返し直ぐに防御の姿勢に移る。
瞬間、魔力で体を覆い尽くす。

私がやるべきことは攻撃に耐えること。

衝撃っ！

閃光と共に再び放たれた無数の弾が容赦なく私を襲う。

十、

まだだ！

百、

頑張れ私！

千、

耐えろ！

万っ！！

真っ黒な闇が私の視界に広がっている。

体全身が感じる苦痛の二文字。

だけど休んでる暇はねえんだ。

カッと開いた双眼で顔を驚きに染めている敵を見据えた。

「ニヒヒヒッ！ 今だ！」

同時、巨人の魔物をめがけて飛ぶ。

これがシエルちゃんと私が見つけた答えだ。

宙を駆けながら何回も何十回も体を回す。

そしてその勢いを利用して思いつ切り拳を放つ！

「シ、エル、パンチイイイイ！」

名一杯、力を込めた拳で巨人の魔物を数十メートル吹き飛ばす。
壁に衝突し、そのまま気絶したことを確認した。

「……やった、倒したんだ……」
「あまり嬉しくないようだのお」

微妙なところかな嬉しいけど嬉しくない。だって中ボスレベル……だぞ？

勝てないと思っていた敵に勝利を収めるのは悪くはないがもしかしたら巨人の魔物レベルの敵がまだいるかもしれない。

一匹だけ相手にするだけで体力と魔力を残り一割までに減らされている。

しかもこうしているうちに騒ぎに気づいた魔物たちがこちらに向かってきているし……。

流石に全員がコイツみたいな戦い方をするわけでもないから、なあ……。

「つまり全員がやつみたいなの戦術を取るのなら勝てると？」
「無理です！」

即答する。これはこれで厄介なんだよ。つか一対一なら大丈夫だ。今みたいにすぐにカウンター入れればいい。

多勢に無勢だとオレがあいつらにボコボコにしてやんよ！ されてしまうから無理。

巨人の魔物の戦い方はメツチャシンプルだ。とにかく避けて撃つ。シエルちゃんがいなかったら気付かなかったが巨人の魔物も魔力を使って体を強化したりしている。だが私とは違い魔力の消費が激しいのだ。圧倒的な攻撃力を持ちながら私が攻撃を仕掛けた時しか反撃してこないのはこの為だ。一撃放つたびに大量の魔力を消費する。だから戦闘中に魔力を補充して溜め込んだエネルギーを全て連射銃に注ぎこむのだ。最初、私がそれを防いだときに明らかに有利だったはずの巨人の魔物が驚いたのは連射銃で決めるつもりだったのだろつ。だけど僕が何度も何度もシエルパンチャラメールキックを使

い移動と攻撃に魔力を消費したせいで十分な威力が発揮できなかった。更に連射銃は全ての魔力を注ぎこむので暫くの間、高速移動など行えない。まあ、一人だけなら突っ込んで突っ込んで攻撃してきたら全力で防御してからそこを叩くという戦法は通じる。

だが仮に二体いて二体とも同じ戦い方をするのなら？

ハッキリと言おう。勝てるはずはない。

「ならどうする？ 逃げ出すか？ 奥には確かに貴様と同じ勇者がいるが、こやつと似たような力も幾つか感じる」

今から行く場所には巨人の魔物並の力を持った敵がいるのか……。

まあ、私の答えは最初から最後まで一つだけ。

「行くか」

「……本当に行くのか？ 今なら逃亡という選択も可能だがのお？」
「逃げたらさ約束を破ることになる。逃げたらさ皆の笑顔を守れなくなる。私はここにいて、戦える力を持っていてさ……もしかしたら世界を救えることも出来るかもしれないんだよ。それが仮にゼロパーセントに限りなく近くてもゼロじゃない。つつかゼロならパーセントに変えてさっさと一人でも多くの人の笑顔を守る。それだけ」

進むよ。バグちゃん、チートくん、リアル写 眼ちゃん、シエル……行ってくる。

僕にしか出来ないことをやりにね。

「妾……主と共に」

「ああ、行こう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4963m/>

勇者と呼ばれる僕と彼らの存在意義

2010年10月10日20時29分発行